

修羅から土師氏へ

熊谷操子

復元修羅

とにかくにものおもわず宮たくみ

打つ墨縄のただひとすじに

と歌った宮大工の西岡常一さんが、平成七年四月十一日、八十六歳の天寿を全うした。この人が、法隆寺や薬師寺の伽藍の大修理をしたことは余りにも有名である。

「神と崇め、仏法を拝せずして伽藍や社頭を口にするべからず」と、祖父から教えられ、歴史や仏教の勉強にもなかなか熱心だったと聞いてその人間性に敬服している。

その西岡氏が、昭和五十三年に手がけた復元修羅をまたぞろ観たくなくて、うそ替え行事で有名な道明寺天満宮へ出かけた。平成七年三月末である。

天満宮に梅はつきもの。この宮もその例に洩れず、広さも広し見事な梅林がある。その時期には観光客が頗る多い。梅に酔う人たちのかしましさもようやく終わり、まして学生達の神頼みもとうに済んでいる筈だから、境内は静けさを取り戻しているだろうと見越して三月末を選んだ

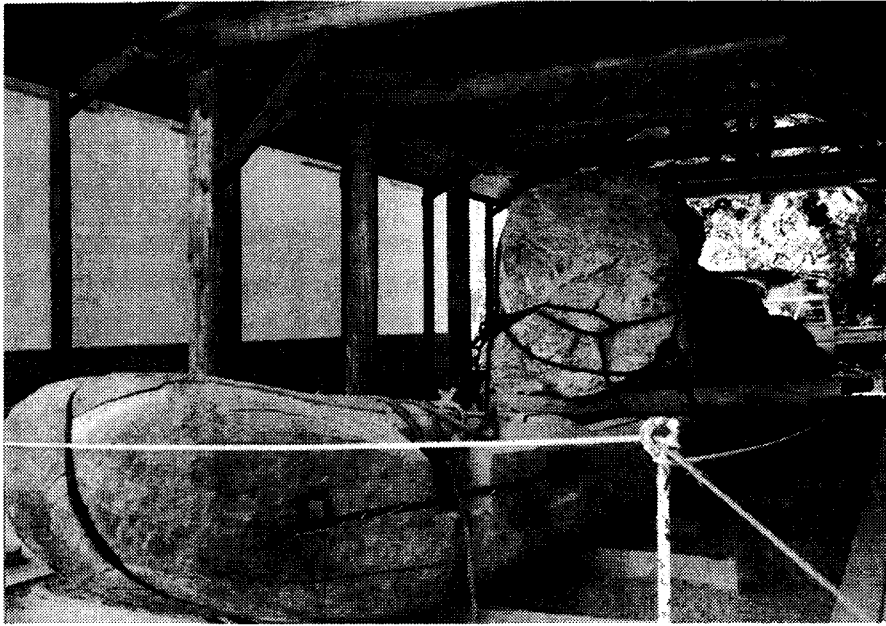
のである。

木を知り木を活かすという信念のもとに造られた修羅と静かに対話するにはもってこいの時季であった。

昭和五十三年四月に、藤井寺市の三ツ塚古墳（仲ツ山古墳の陪塚）の周濠跡から、古代に土師氏が使っていたとみられる大小二つの修羅が、殆ど原型を保ってテコらしい材木と共に出土した。その時は、空ではヘリコプターがローターを競い、陸ではマスコミ関係の人間が足の踏場もないほど押し寄せ、藤井寺市は時ならぬ大騒動であった。有名無名の考古学者は、きつと手の舞い足の踏むところも知らぬまでの喜びを味わったことだろう。私たち素人でもなにかワクワクしたものを感じたから。大きいほうはアカガシで出来ていて八・八メートル。小さいほうはクマギかアベマキで二・八メートル。学者達によってそれは五世紀半ばのものだと推定された。

出土したその修羅を忠実に復元したものがこの道明寺天満宮の境内の一隅にあるというわけ。物好きなど笑われながら、私はこれと対面するのが三度めである。

朝日新聞社は、実験考古学の一つの試みとして復元を考えた。原木の材料は沖繩徳之島の原生林で選んだオキナワウラジロ櫨で、西岡氏が外



道明寺天満宮の復元修羅

四人の宮大工と共に、特性のオノ、チョウナなどを使って約一ヶ月かけて製作したと言われている。原型とまったく同じようにとの心遣いは大変だったろうと想像出来る。これに携わった五人の精魂というか気魄というか、それは最高の職人氣質と言えるのではないだろうか。その前に立っていると、それらがジンジンと伝わって、なにかしら温かいものがこみがたつてくるような感じがあるのである。折から境内に遊びに来ていた小さな子供が二人、この周囲を無邪気に走り回っていたのも、特に可愛く頑是なく私の眼に映ったのはどういいうわけだろうか。

ホンモノ修羅

さて現物は木造物のこと。今まで長く地中に眠っていた状態から空气中に現れると同じに、酸化、腐蝕、乾燥が始まるので、当時大阪府は、この修羅保存を藤井寺に依頼したらしいが、市は手に負えぬと即座に断つたと聞く。結局、元興寺文化財研究所がこの大仕事を引き受けることになった。

生駒の研究所では、九メートル近いこの怪物のために専用のプールを造り、ポリエチレングリコールなどの薬品で含浸法を試みながら模索し研究を続け、それに十四年もの日時を費やしたという。私たちが想像も出来ないほど、研究所の手を焼かせたことだろう。増澤文武氏以下スタッフの方達のご苦労はさぞかし……と察せられる。

一〇二基もの古墳がある近つ飛鳥風土記の丘(用明陵、推古陵の南)に、平成六年、新進建築家安藤忠雄氏の設計になる、近つ飛鳥博物館が建てられた。

初めての企画展は「輝きの復原、古墳、飛鳥の技術を求めて」という文句である。その会場にホンモノ修羅が現れたとあってはじつとしいられない。すぐ飛んで行ったのは言うまでもない。この南河内はシルクロードの終点とも言われているだけあって、その出土品もなかなか特殊性があつて面白い。枚挙にいとまがない程の素晴らしい展示物の中にひととき目立つ大修羅が、ドーンとその雄姿を誇っているではないか。

私は只管修羅の前に張りついていたままであつた。静かに宝蔵庫で眠っていたが、立派な博物館が出来たのを機に、この度晴れて私たちの目前にその偉容を見せてくれたのだ。ホンモノなのだ。ホンモノなのだ。それはまさに世界的な保存処理の遺産である。その色は焦げ茶と言えば良いのか、いや漆黒と表現したほうがピッタリかも知れない。つやつやとした感じの巨木に圧倒されたと言うのが本音。

寸法は先の天満宮のと違わない。オットうっかりしていた主客転倒。こちらがホンモノだから当然のことである。八・八メートル、三・二メートルのその大きさにあらためて呆然としていた。頭部より二メートルほどの所から上部をはつり取って荷物（石）を載せる台になっており、足部には斜めに穴を開けて、荷綱を通すようになっていて。その荷綱を引くかけ声が、ヨイシヨイシヨと、まるで怒濤のように押し寄せてくるような錯覚におちいり、強化ガラスケースに張りついた私の眼はなかなか離れようとしなない。

それにしても、白い大布で嚴重に梱包され、大きい機械で吊り上げ、大型トラックに載せ「大修羅」と筆太に書かれた幔幕を張り、生駒から

この阪南ネオポリスに運ばれたその工程や道のりには、ニトログリセリンを扱うような細心の注意が払われたことだろう。

出土当時、これがこんなに人気者になるとは予想もしていなかっただろう藤井寺市としては、いまちよつぱり「ほぞをかむ思い」を味わっているのではないかしら、とは私なりの想像である。ともあれ、これを発明した先人（土師氏だろうと思う）の知恵に舌を巻き、只々感動の吐息をガラス越しに浴びせながら、心の中で脱帽するのみであつた。

平成六年十一月に、中国甘肅省の文物展「シルクロードのまもりーその埋もれた記録」と銘打って、秋の特別展が件の博物館で催された。

「敦煌木簡の語り」に耳を傾けて見ようかしら、春になったばかりの大修羅とまたデートが出来ると、また出かけることにした。

上下から近鉄喜志駅までの距離より、阪南ネオポリスまでのバス二十五分が、私をイライラさせた。漢代の刑罰を記した木簡や、世界最古の紙に書かれた地図等も興味をそそったが、やっぱり私の時間は修羅の前。そこに居るほうがご機嫌であつた。

坪井清足氏の言によると、津堂城山古墳の巨石や石棺等もこの修羅を使ったのではないだろうか、とのことであつた。

修羅と五回のデートを重ねるうち、陵墓の造成を職業とした古代の有力氏族である土師氏とは……という思いに至つたのである。

道明寺天満宮

参道の尽きた所の左側に「土師窯跡」と彫られた大きい碑がある。土師氏に統率されていた土師部が、この場所で埴輪や、祭祀用土器や、宮

廷用の食器類を焼いていたのかと領きながら、この近くの誉田八幡宮境内にも窯跡があったことをふと思い出した。

右側には土師八嶋の碑があるが、これはもともと誉田山古墳の傍らに陪塚としてあったものを、明治初年にこの場所に移されたと聞く。又その右側には「夏水井」と称する井戸がある。元慶八年（八八四）、土師寺（現道明寺）に於て大乘経を書写する時に、硯の水として使用していたと伝えられ、往古から霊泉として保存されているということである。鳥居をくぐると、セピア色になった由緒書が重々しく立っている。要約すると、



道明寺天満宮の入口左にある「土師窯跡碑」

一、垂仁天皇と野見宿禰の例の物語。土師姓をもらった野見宿禰は、祖先である天穗日命を北丘に祀り土師神社と称す。



元宮 土師社全景

二、用明元年（五八六）土師八嶋が土師寺を建てて氏寺とする。

三、菅原道真筑紫下向の際、土師寺の覚寿尼（叔母）と離別を悲しみ自像を刻む。

四、村上天皇延喜元年（九〇一）土師神社を道明寺天満宮とあらためる。

五、明治五年神仏分離令によって尼寺を西に移転。

とあった。一、にある天穂日命は天照大神の子であり、後記の天夷鳥命あめのとどり是天穂日命の子である。本殿のほかには、境内には石造の明神鳥居あきみじんが設け、朱塗りの本殿を持つ元宮土師社がある。そしてあちこちに小さな祠ほくらがあり、梅林の一番奥まった場所には土師八嶋を祀った祠があった。元宮土師社の祭神を大國主命、天夷鳥命、野見宿禰と掲げてあった。ここにどうして天穂日命の名がなくて天夷鳥命の名があるのかと疑問が起こったが、永年の間にはこんなふう祭神の名が変わることもあるのかと勝手に疑問を解くことにした。それにしても大國主があるのは土師氏の出自はやはり出雲系なのだとして解釈した。

道明寺

吉田靖雄著「河内飛鳥古寺巡礼」の中に書かれた道明寺に、どうしても行ってみたくなくて足を運んだ。尼寺らしく掃除の行き届いたこぢんまりとした暖かい境内で、子供たちが三輪車を乗り回して遊んでいる。真言宗御室派の尼寺で「道明寺ほししい」で有名である。

余談であるが、土師氏の後裔である道真が筑紫に左遷された後、この



梅林奥にある小祠「土師社」

寺に入っていた叔母の覚寿尼が道真のため、毎日お供えにした御飯の下がりくだりを貯蔵したのが「道明寺ほししい」の始まりと伝えられる。その和紙袋の「ほししい」の文字は豊臣秀吉のものであると言われている。話のついでに買ってかえって食べたが、備後の焼き米に少し似たものであった。

土師八嶋が敏達天皇の側近であった頃、天皇から土地屋敷を賜るが、用明元年（五八六）にそれを全部喜捨して、先祖を祀るため、土師社と同じ土地に氏寺を建てて、それを土師寺と名付けていた。

当時は東西三二〇メートル、南北六四〇メートルの広大な境内に五重



道明寺天満宮の入口右にある「土師八嶋大人碑」

の塔、金堂を始めとする七堂伽藍を完成したという。天正年間に消失してその後復興。道真が筑紫へ下向する際、自分の別名である道明をその寺名に変えて道明寺とした。天満宮の由緒書にあったように、明治初年の神仏分離令で天満宮の西方二〇〇メートルの位置に移ったわけである。【紀】の巻第二十一に、土師八嶋と八嶋は同一人物らしいとあるので納得することにした。八島のことを「扶桑略記」で調べると、

九年庚子夏六月。人有り、奏して曰く、「土師の連八島有り。唱歌絶世なり。夜人有りて来り、相和し争歌す。音声常にあらず。八島之を異とす。追い尋ねて住吉の浜に至る。天暁海に入れる者なり」と。耳

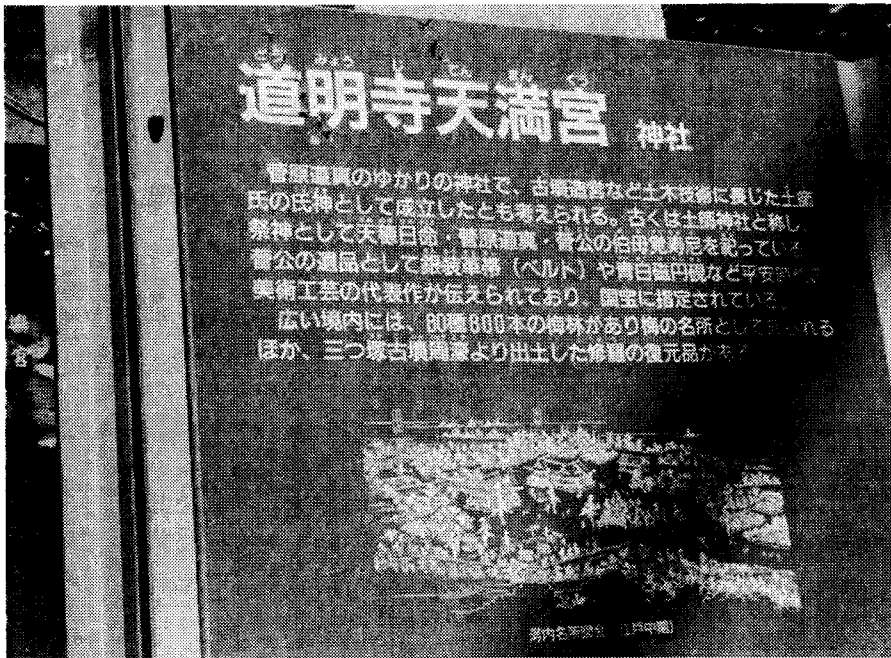
聡王子奏して曰く「これ螢惑星なり。この星、降化して人と為る童子の間に遊び。好みて謡歌を作り、未然のことを歌う。蓋しこれ星なる歟」と。天皇大だ善しとす。

とあって、文中の耳聡王子とは誰なのかと『記紀』の欽明・敏達・用明の頃を調べても見当たらない。ではこれは厩戸豊聡命（聖徳太子）の間違ひではないかしらと思つたが、これは後日の宿題として……。後にも記すことになるが、用明二年蘇我馬子のために使者となつて役に立つてゐることを『紀』で知る。なかなかの人材であつたことが想像された。

土師連

『日本書紀』垂仁天皇の項を調べて自分なりの拙い解釈を試みる。三十二年秋七月皇后の日葉酢媛命が薨じられた時、天皇は近臣達に、「死者を葬るのに今迄の方法ではよくないと思う。この度の葬をどのようにしようか」とおせられた。そのとき野見宿禰が進んで申し上げた。「君主の陵墓に生きた人間を一緒に葬るのはよくないと思ひます」と。そして出雲国の土部壹佰人を呼び、宿禰自らも土師部達と人や馬その他の形の土物を作つて、「この土物を以て生き人の代わりに陵墓に使つて後世の法則としましょう」と進言した。天皇は大いに喜ばれて、「お前さんの発想は大変よかつた。私の心になつた」と初めてそれを日葉酢媛命の墓に立てた。これを名付けて埴輪という。とある。そして天皇は厚く野見宿禰の功を賞めたたえ、現在の道明寺天満宮一帯を所領地として与えたという。その上土部の職を任せ、土部臣という姓

も与えられた。以来天皇及び皇族の喪葬を司るのは土部連になった。故に野見宿禰は土部連の始祖である。



道明寺天満宮の「由緒書」

「続日本紀」の内容もほぼ同じようで、「天穗日命より出た氏族」という点も一致する。

「古事記」には、日葉酢媛命の葬の時に、石棺造りを定め、また土師部を定めた、と簡単に載せてある。

垂仁紀のこの埴輪伝承は、単なる伝説に過ぎないと言い切る学者もあるらしいが、私達にはその可否は解からない。

土師氏の歴史

「記紀」「続日本紀」その他で、土師連・土部連とあるが、通説通り私も同一と考えてベンを進めることにする。この土師連が天武朝の賜姓には土師宿禰となる。

天応元年（七八二）土師宿禰古人、土師宿禰道長ら十五人による「天応奏言」の前半には、天穗日命十四世の孫が野見宿禰で、これが土師連の始祖にあたと記し、日葉酢媛への功績談も載せている。それは「日本書紀」に伝えられたものをそのまま言っているのか、それとも又は、土師氏の家に伝わる系譜によったものかは私達には分かるべくもないが、直木孝次郎「土師氏の研究」によると、

「日本書紀の記事が、土師氏が代々伝えてきた家伝によったことは推理して誤りあるまい」

と述べている。又、「天応奏言」の後半には、

「祖業をみると、諱辰には凶を掌り、仁徳朝以来は祭日には吉に預かるというように、吉凶相半ばの仕事をしてきたのに、今は専ら凶儀のみ預かるようになったのは大変不本意である」

とクレームをつけている。そして地名にちなんで菅原姓にしていただきたいと要請している。ちなみに仁徳紀に土師氏に対して吉儀云々の記事はない。

米沢康「土師氏に関する一考察」(芸林)第九卷第三号)及び「日本書紀」による喪葬関係の記事は左の通りである。

- 一、垂仁三二年七月、先に記した野見宿禰の功業(日葉酢媛の薨)。
- 二、仁徳六〇年一〇月、白鳥陵(日本武尊)の陵守を役丁にさしたところ、異変が起こったのでもとに戻し、これを土師連らに授ける。
- 三、雄略九年五月(四六五)大將軍紀小弓宿禰が亡くなったので、大連大伴室屋は勅を奉じて、土師連小鳥に塚墓を田身輪邑に造らせる。
- 四、推古一一年二月(六〇三)、征新羅大将来目皇子が薨じたので、周防の娑婆さばに殯ひなし、土師連猪手いのを遣わして殯事を掌らせた。猪手の孫を娑婆連さばといふのはこのことによる。
- 五、皇極二年九月(六四三)、吉備嶋皇祖母命が薨じたので、土師娑婆連猪手に皇祖母命の喪を視させた。
- 六、白雉五年一〇月(六五四)、孝徳天皇が崩じて殯を南庭に起こした時、小山上百舌鳥もず土師連土徳はとくが殯宮の事を司る。

以上のように土師氏が関係した喪葬の重大なものとしては、天皇、皇族、朝廷の高官まで扱っているが、その他の喪葬関係の職も沢山ある。

【続日本紀】から奈良時代のものを拾い上げてみると、

- イ、文武二年正月(六九八)、直広参じきこうまきん(正五位下に相当)土師宿禰馬手は新羅の貢物を大内山陵(天武陵)に献じた。
- ロ、文武三年一〇月(六九九)、直広参土師宿禰麻呂は、浄広肆衣縫王らと共に越智山陵(斉明陵)に行き修造に当たった。
- ハ、直広参土師宿禰馬手は浄広肆大石王らと共に山科山陵(天智陵)に行き、修造に当たった。
- ニ、大宝三年一〇月(七〇三)、持統太上天皇の葬儀に際し、正五位下土師宿禰馬手は造御竈みまづまを副となる。その折の長官は四品志紀親王である。
- ホ、慶雲四年一〇月(七〇七)、文武天皇の葬儀に際し、正五位上土師宿禰馬手は下毛野朝臣古麻呂らと共に造山陵司となる。
- ヘ、天平三年六月(七三二)、外従五位下土師宿禰子村諸陵頭みまのりかみとなる。
- ト、天平六年四月(七三四)、地震のために山陵が崩れたことを恐れ、諸王と真人姓の貴族に土師宿禰を一人添え、諱の所八処と有功の王の墓を検看させた。
- チ、天平九年一二月(七三七)、外従五位下土師宿禰三目諸陵頭みめとなる。
- リ、天平一八年(七四六)、外従五位下土師宿禰牛勝諸陵頭うしかつとなる。
- ヌ、神護慶雲二年二月(七六八)、外従五位下土師宿禰位諸陵助となる。

ル、宝龜二年七月(七七二)、外従五位下土師宿禰和麻呂諸陵助となる。

直木孝次郎は「土師氏の研究」の中で「大日本古文書」につきの二例があると記している。

オ、天平一七年一〇月(七四五)、諸陵寮大属従七位上土師宿禰年麻呂ワ、天平一七年一〇月(七四五)、喪儀司佑正六位上土師宿禰吉足土師氏のほかにも多少喪葬にたずさわった氏族もあつたらしいが、以上のように土師氏ほど喪葬のことに多く関わった氏族はほかには見られない。そのことをみても土師氏にとっては重要な職業であつたことは間違いないと思う。

【日本書紀】の雄略一七年三月の項に、土師連祖吾おやあけ「朝夕の御膳を盛るべき器を進らしめよ」との詔により、摂津国来狭狭村外数村や諸国の私民部を進め、贄にえのはしほ土師部と名付けたとある。祭祀用の土器だけでなく、この時期からは宮廷用の食器まで焼き始めたことがわかる。

土師氏の職業は、天皇、皇族、高官の葬とのみ、おおよっぱに思い込んでいたが、軍事や外交にも手腕を振るっていた事を知り、それらを調べていくうちに、自分の認識不足を存分に思い知らされた。

【日本書紀】によると、

A、用明二年六月(五八七)、佐伯連丹にふて經手、土師連磐村、的臣いづかおみ真嚙まなの三人兵をひきいて速やかに穴穗部皇子と宅部皇子を誅殺せよとの詔を

受け、穴穗部皇子の宮を攻めてこれを誅す。

*磐村らが奉じたのは、炊屋かきや姫尊ひめのみことで、のちの推古である。

B、皇極二年一月(六四三)、大仁土師婆婆連は、小徳巨勢大臣と共に蘇我入鹿の命によって、山背大兄王(聖徳太子の子)を斑鳩宮におそい、戦死をとげる(矢にあたって死ぬ)。

C、天武元年六月(六七二)、土師連馬手は大海人皇子の軍に従って使者となつている。

天武元年七月(六七二)、土師連千鳥は近江朝廷側の武将として村国男依らと戦い、安河の浜(滋賀県野州川)で捕えられる。

D、天武一一年三月(六八二)土師連真敷は壬申の乱の功によって大錦上を贈られる(亡くなつてから)。

E、持統四年一〇月(六九〇)、大伴部博麻はろまに下された詔によって、土師連富村はとむらが永連老・筑紫君薩夜麻さつやま・弓削連元宝もとたけ見らと共に斉明七年の百濟救援の戦いに参加した。

A、推古一八年一〇月(六一〇)、秦造河勝と土師連免うきまは、新羅の使者の案内人になる。

B、白雉四年五月(六五三)、土師連八手は遣唐使の送使となる。

C、持統三年五月(六八九)、土師宿禰麻呂は新羅の弔使とがひき級きゅう金道那きんどうなに詔を伝える。

A、用明二年四月(五八七)、土師八鳥連は蘇我馬子の使者となり、大伴

連叱羅夫のもとにゆく。

B、大化五年三月(六四九)、蘇我倉山田石川麻呂の変に際し、土師連身は采女臣使主麻呂と共に、山田寺より馳せて將軍大伴連らに山田麻呂の自殺を告げる。

C、天武元年六月(六七二)、屯田司舍人土師連馬手は大海人皇子の一行に食を供する。

D、天武一三年二月(六八四)、土師連ら五〇氏に宿禰を賜う。

E、天武一三年二月(六八四)、唐への留學生土師宿禰甥ら新羅を経て帰国する。

F、持統三年二月(六八九)、浄広肆竹田王、直広肆土師宿禰麻呂ら判事に任ぜられる。

G、持統四年一〇月(六九〇)、詔して、この年来朝した新羅の使者の待遇を土師宿禰甥を日本に送り届けた使者の待遇に准じさせた。

*外交の腕を買われたのでは……。

楯伏儻

「書紀」持統二年一月戊午の条にあるが、近年、林屋辰三郎氏を始めとする諸家によって、この楯伏(節)儻が研究されているらしいが、この舞と土師氏との関係もなかなか興味をそそられる。

直木孝次郎説によると

「甲、刀を持ち(戦の装束)楯を伏せて服属の意を表わした戦闘の状態を演じたものらしい。帰化民族でありながら、軍事的性格を強く持つて

いると言われている東漢氏といっしょに演じるのが土師氏であるから、土師氏もまた軍事的性格の強い氏族とみられる。これは陵墓の築造にも関係があるかもしれない」とある。

殯宮で捧げられるこの厳肅な舞から、土師氏の軍事的性格を結びつけるのは、考え過ぎではないかという気もするが……。

巨石を組み合わせて造り上げるあの横穴式石室には、高度な技術を必要としたであろう。それらを大陸の文化から得たとするならば、先の箇条書に記した外交的手腕は、そんなところから自然に培われたものではないかしらと想像する。

大化の薄葬令

大化の薄葬令は、土師氏の持つ家職と、それによる勢力を根幹からゆるがしたことは言うまでもない。巨大な横穴式石室と、それを覆うおびただしい封土を持つ古墳は、この時から過去の語り草となつてゆくのである。当時としての一大政治改革の波には、押し流されるほか仕方がなかったと思うが、一朝一夕にすぐ転落の道を転げ落ちるような氏族ではなかったと思う。土師部や贄土師部を統率してきたブライドある土師氏であるから、それなりの努力をしたであろう。

土師氏の改氏姓

奈良時代末期の転換期に、垂仁期から連綿と続いた伝統ある土師姓を捨てて、改氏姓を願ひ出た理由は私にも理解出来る。大和朝廷と流れを共に発展してきた古代の氏族も、仏教台頭の状況の前には、古い伝統に

別れを告げなければならぬのは当然である。その情勢の中から起こった新氏姓には、菅原・秋篠・大枝の三種がある。土師氏の四腹は、どの学者も認めているらしいが、改氏姓による別れにはいろいろの説がある。

『続日本紀』に次の記事を見つけた。

高野新笠を生んだ土師氏は、毛受系統の支族（毛受腹）である。この毛受系が大枝朝臣となり、他の三支族が秋篠朝臣・菅原朝臣となった、とある。

小出義治説によると、菅原姓は「居地の名に因んで」定められたという土師安人の奏言にあると論じている。故に土師氏の中には菅原という土地を本貫とする有力な一群があつたことが分かる。それでは秋篠は：と考える時、秋篠寺のある土地だと思ふのが穏当であるかも知れないが、学説がいろいろで私如き素人には分からないと言ふのが本音。ともかく秋篠・菅原の二腹は、垂仁陵のある地域を根拠としていたらしい。あとの一腹は、大古墳として有名な羽曳野市にある誉田山古墳を中心とする古市古墳群を本拠とした土師氏ではないだろうか。そしてこの一腹が改氏姓を願ひ出る勢力で、団結を失つていたということであるが、素人考えかも知れないが、僅かの資料の中でそれらを調べるうち、この地方の人数が圧倒的に多くて、他の三腹よりもまとまりがつかかねたのではないかと推測する。

余談になるが、最初に書いたホンモノ修羅は、地理的にみてこの氏族が使用したものと確信している。

行基と土師氏との関わり

『天平十三年記』の行基の年譜によると、七一〇年に行基は、畿内の四ヶ国（山城、摂津、河内、和泉）に九ヶ所の布施屋を建てているが、七ヶ所までは省略する。

八、大鳥布施屋（大鳥郡大鳥 堺市）

九、野中布施屋（大鳥郡土師里）

六、七が河内国で、八、九が和泉国に属するが、和泉国は天平宝字元年（七五七）までは河内国に属していたから、八、九も当時は河内国に属したと思われる。九の位置が土師里とあるように、ここは和泉国の神別としてあげられる土師宿禰や土師連の本拠地であつたことが分かる。祭祀用の土器や埴輪を造り、古墳の築造に関わつていた土師氏に四腹があることは先にあげたが、ここが百舌鳥系統で改氏姓で大枝朝臣となつたのである。仁徳陵古墳を中心として活躍したと思われる。

井上薫『古代河内通史』から拾つてみると、行基が神亀四年（七二七）に和泉国に建てた大野寺に、かつて残つていた土塔の突出部の表面にある丸瓦や平瓦に、人名をヘラ書きしたものが九十例も出土したものがあつたとか。行基が木造楼閣でなく、土築の塔の形式を採用したのは、インドの塔（スツーパー）が土饅頭を基本としたことになつたらしい。

仁徳陵古墳を中心とする百舌鳥古墳群が、大野寺の北方に広がり、行基は、その巨大な土築の古墳からもヒントを得ると共に、それに張り合つて釈迦の墓を土盛り形式の土塔に造つたと思われる。更に土塔出土の人名瓦に土師氏の名が見えるのは、その付近に住む土師氏が行基の信者の

中に居り、その土木技術を大いに利用して土塔を築造したと思われる、とあった。余談になるが、

梅原猛「塔」の中で、「巨大古墳を一種の塔とみている」と、著者は述べている。行基や土師氏の中でも、ひよっとするとそんな気持ちもあつたのではないかと、私は想像した。

最初に列記した箇条書のように、喪葬という本来の家職に忠実であつたことは勿論であるが、その中には八島のように稀にみる音楽家もいれば、楯伏儺に素晴らしい演技を見せる芸術家もいる。また、新羅との国交にも大いに外交的手腕を発揮したものもいれば、学者としての土師氏もみえる。その上、軍事的性格がもともあつたものかどうかは分からないが、軍事の箇条書A、B、Dのように、なかなか勇敢な面も持つてゐる。

大化以後、葬制の変化によつて勢力を失ふことの不安は、確かに深刻であつただろう。だからこそ、先に述べたように、海外に留学したり外交に関係したり、時代の流れに翻弄されながら、新しい前途を切り開こうと努力して生きた氏族ではなかつただろうか。

土師氏については、未知の世界への踏み込みに似た不安がないでもなかつたが、反面、なにかワクワクするものも感じた。まだまだ勉強不足ではあるが、こけそうな背伸びをしながら覗き見をした顛末を、一応活字にして頂くことにした。大いなる羞恥心を脱ぎ捨てて。